

# 三河 アララギ

平成二十三年

六月号

第五十八卷 第六号



ニューヨーク日記(56) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

March 5, 2011 : American String Cheese

## Blue Shoe Diaries



ストリングチーズって好き？子供の頃よく食べなかった？美味しいからって言うより楽しいから食べた記憶がある。今度は美味しいストリングチーズ見つけ！アルメニア風のこのチーズロープのようにクネクネしていて超長いチーズが裂けるよ。フレッシュモッツァレラのようにミルクっぽい味がしてキャラウェイシードがお子様の味をちょっと大人にしてくれるの。くせになるかも。

Did you grow up eating string cheese? I remember eating it more for the fun of it than for the flavor of it. I had a new discovery a few months ago. Armenian string cheese. It's fun and delicious! And because it's braided, you can make a super long string out of it. This one's more fun and yummi-er. Love the caraway seed on it too. It makes it a little more grown up. ShoeLady seems to approve too. It's gone missing from the fridge!

# 目次

## 第五十八卷第六号(通卷六九〇号)

表紙・花菖蒲	今泉 由利 (1)	叡山董	小野可南子 (26)
ニューヨーク日記(56)	Blue Shoe (2)	防人の地へ(1)	夏目 勝弘 (27)
目次	(3)	野仏	秋山 逸穂 (28)
感銘歌・御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より	(4)	セピア色	伊藤 忠男 (28)
歌集二本の木	杉浦 弘 (5)	沖に向ひて	白井 信昭 (28)
小さき大根	岡本八千代 (6)	ことよせ	いーはとぶ (29)
治癒	白井 久吉 (7)	俳句	現代学生百人一首 (29)
生命	今泉 由利 (8)		植村 公女 (30)
相共に	伊藤八重子 (9)		一石 (30)
よきかなよきかな	青木 玉枝 (10)		喜仙 (31)
セーラー服	安藤 和代 (11)	私の一首	皓一 (31)
粗食の工夫	林 伊佐子 (12)		青木 玉枝 (32)
身を護る	胃甲 節子 (13)		安藤 和代 (32)
春の香りす	清澤 範子 (14)	贈呈誌 四月号	胃甲 節子 (32)
山桜	金津 文枝 (15)	“つなみ”	伊藤 忠男 (34)
卯月の小雨	近藤 映子 (16)	和歌から派生した季語の本意(その十二)	佐藤 喜仙 (35)
天女の如く	半田うめ子 (17)	物理学者と詩歌の世界(17)	一石 (36)
大栗安へ	佐々木利幸 (18)	鎌田敬止という人(五十四)	鮫島 満 (38)
大根	内藤 志げ (19)	絹の話(6)	今泉 雅勝 (40)
京小袖	弓谷 久子 (20)	「水魚」のことから(125)	岡本八千代 (41)
始まりは	杉浦恵美子 (21)	ことのはスケッチ(390)	今泉 由利 (42)
想定外	北川 宏勉 (22)	和菓子街道(56)	平松 温子 (44)
心配なり	伊与田広子 (23)	お知らせ・編集後記・三河アララギ規定	
雑草	平松 裕子 (24)		
八重葎	山口千恵子 (25)		

## 感 銘 歌

御津磯夫第二歌集「ノボタンの窓」より

あきらめのまなこうすらにワニはをりいで湯を浴みし人覗きゆく

P  
168

方形に凍れる烏賊のならびたるまなこは蒼き天を見るべし

P  
169

歌集 一本の木

杉浦 弘

朝夕をそひつつ通ふ谷川に河鹿頻き鳴くふたところあり

底ごもる朝のどよみの奥にしてかすかに啼けり高松の鶏

雨にけむる若葉の山を見つつをりなにか柔らかくなる思ひにて

## 小さき大根

蒲郡 岡本八千代

どんよりと雲の広がる空の下小さき大根の捨てられてゐる

捨ててある小さき大根にも花びらのいまだに白くほろほろとして

哀しむべきことはかなしめ大根の花の白さよこの健気さよ

三河湾の潮波けふも流れゆくあのイーハトーヴの彼方へまでも

海の方黒雲速しけふの空などか悲しくなりてきにけり

雨降らば雨ニモ負ケテシマヒサウ悲しきことはかなしめばいい

季来れば季の花咲くほつほつと今年も空木の花蕾の白

けさの日の輝くときに電話あり「三千二百瓦女子をみな生まれた」

孫娘つひに女の子授かりぬミトコンデリアは繋つながるのか

お供への「紡うたぎ詩」とふ京菓子をまづはいただく今日の喜び

## 治癒

新城 白井久吉

戒めは素直に聴けと知りつつも聴かざりし悔いを人には告げず

右肱みぎひじの骨をいたためて数日は一日の長し寝ても覚めても

鍬を持つこと難ければ馬鈴薯の植ゑ方をただ教へたるのみ

世の中のひとりひとりがこひねがふ平安は又も永く続かず

何もせず何もできずに真冬ほど厚着せしまま春は暮れゆる

母親のシャツの横文指さしてエー・ビー・シーと幼児はいふ

燃えやまぬ大き異火を悲しめる歌人の歌をくりかへし読む

レントゲン写真とカルテを前にして医師は静かに治癒を告げたり

糲種の塩水選も勤め持つ息子に任せことなく済ます

春過ぎて夏の近づく今もなほ厚着のままに炬燵も止めず

## 生命

東京 今泉 由利

ムズムズムズ鼻先ムズムズムズムズムズし放射能を嗅ぎあてたらし

太陽の核融合反応に生命つくられ生命こわるる

地球なる大気に混入人工の放射能と共存はじめ

夕あかり頼み窓辺に寄りてゆく逆らひをりぬ原子力発電

ぼつねんと闇ゆく部屋に籠りゐてただただ暗い暗闇となる

薄明の空に向へりあとすこし地平線に太陽来たる

幾十億をくり返しこし地球の朝今朝あしたの光の遍ねし眩し

織女ベガ牽牛アルタイルそしてデネフやうやく見付く夏の大三角を

十五光年隔つるベガとアルタイルと近くしありぬ私の内に

あまりにも理不尽なこと起る日々音たてて食む紫大根



## 相共に

豊川 伊藤八重子

つばくらめ青葉に翻へる短冊を出だして新たなる季を迎へる

新聞紙拵げて手足の爪を切るデイサービスが明日より始まる

広々のあの大空に待つらんか父母のふところ唯に恋ふる日

酒蒸しに又味噌汁によるこべり子の採りたての御津浜あさり

色淡きピンクの上履きえらびをり明日よデイケア楽しく受けん

赤芽櫛赤々萌ゆるおとわの杜今日よりお世話になりますと入る

朝よりもほぐれし笑顔と言はれつつおとわの杜より送られ帰る

一夜<sup>ひとよ</sup>さを覚めず眠りて快しデイケアに程よく疲れて

高台のおとわの杜より見降せば一号線を車列が走る

相共に杖つく<sup>みたり</sup>三人となりにけり竹島橋を見降すところ

よきかなよきかな

伊丹 青木玉枝

鈍色の木曾川の流れば車窓にて墓参に帰るふる里近づく

「来ましたよ」墓石の夫に声かけて草取り始む親子二人で

伊丹では鶯の初音こゑもきかざりき初めて聴くや墓石の森に

海辺に立ち寄せ来る波音きき乍らああ故里はよきかなよきかな

憂き日あり楽しき日ありこもごもに生ける証と今は思へり

墓参終へ食事もうまし故里を花や小鳥に癒され帰る

川土手に腰を下してひと休みよもぎ一面のみどりの匂ひ

街路樹の芽吹きはきらきら朝毎の試歩の目にはまばゆきばかり

ふと忘れふと思ひ出し立ち止る老いゆく生活のひと日ひと日を

春嵐ひと夜を荒れて雨となり側溝の穴を厚く積む桜花はな

## セーラー服

豊川 安藤 和代

日びテレビの震災被害に胸痛く花大根は色淡く咲く

盛岡の猪去的場の吾が友よ受話器冷めたく号泣を聞く

指丈程の孫の使わぬ鉛筆で孫の歌詠み孫の歌書く

ダイエット常に思へど明日からと伸ばしてけふも饅頭ふたつ

隣家に男の子誕生この春は吾が家も皆んなそわそわとして

ときめきも薄れゆく身に街中で松潤に似し男性を見る

逝く春を惜しむか今宵降る雨は葉陰れに咲く侘助ぬらす

セーラー服着れば昨日と別人の孫となりたりけふ入学式

吾が母校廃校となりしその跡は保育園となり市民館となる

耕地整理の記念石碑に父の名の刻まれあるをそつと撫でみる

## 粗食の工夫

岡崎 林 伊 佐 子

夕方は雨になるとの天気予報急遽きゅうきょいで行く椎茸採集

宿泊の予定も立てず食品も持たずにきたり粗食の工夫

日帰りが宿泊となりし山の家おもわぬ事態に歌が生まるる

道の辺に一握ほどの野蒜つみ夕餉に味わふ酢味噌の和え物

櫨の木の子芽をつみどうだいの若芽も摘みて天ぷら旨き

羚羊も猿も何処に行きたるか椎茸あまた櫛木に残れり

春蘭は落葉の中に潜むごと翡翠の色して下向きに咲く

住み捨てて都会に行きし隣り家の古き農具も軒に廃れる

廃屋の庭に咲き継ぐ桃の花ゆきやなぎたれ明るき野路は

春耕に野鳥は身边に寄りて来てわが目に見えぬ地虫を啄む

## 身を護る

豊橋 胃 甲 節 子

秋蒔きの遅れし小さき花達も可憐なピンクの花咲き初めぬ

何処ゆく事も叶はぬ吾なればせめて雑誌の花めぐりの旅

北風に散り敷く花びら許し給へせめて隣の側溝を掃く

満水の牟呂用水に沿ひにつつ短かき散歩の時間終へたり

遠くにて啼く鶯の初音聴く未だ庭には来啼かぬ四月

思ひ切り仕事控へて身を護る死に至る喀血を起こさぬ様に

大好きなサンデー版の数独も解かず三週取り置くばかり

桜の花椿も終り色淡き桜若葉の陽に映へ優しく

初めての黄蝶優しく舞ふ庭に終りの花びらゆらゆらひらひら

野の花のイヌのフグリの瑠璃色の可憐な花群つづく野の路

## 春の香りす

春日井 清 澤 範 子

スーパーを巡れば絹さやえんどうの春の香りす吾の心に  
吾が庭の赤白混りの椿花中に一輪深紅に咲く

今年は庭師を入れて剪定をする椿の枝またカイズカイブキ  
喘息にて伏し居る内に吾が庭に春風吹きて庭椿咲く

燕をまき二葉ばかりを猫が来て散らししままに青葉伸び来る

歩くにはふらつく吾も自転車に乗れば重心うまくとれたり

桜木の赤く落ちたる萼をふみ葉桜見上げ夫と歩くも

膝腰に良きと聞くなり薬剤の風呂を沸してゆったり浸る

歩く時手を引き吾を気付かひくるる娘に有難う感謝

足重き副作用あり神経の病少し少しづつ癒へくる

## 山 桜

島 根 金 津 文 枝

八幡宮の境内に一本の山桜満開に石畳に落花夥だし

風ありて山桜散る花吹雪石畳はピンクに染まる

裏大山に真向ふ丘野焼黒々と広大な跡菜種の黄色美し

宝塚より池田三車線渋滞中十二キロを車連る

渋滞の三車線のその間オートバイの若者は行く

万博公園桜並木の満開の岡本太郎の塔を見仰ぐる

南は銀杏大木東に南京櫨の街路樹美し

三万人並び長椅子に大広場ハツピ姿で神楽称える

淀川と大坂城見ゆ造幣局の桜トンネル満開に花吹雪浴びながら

桜一本その一本に名前つけ俳句の短冊ぶら下がりをり

## 卯月の小雨

名古屋

近藤 映子

南北に無気味にゆれし八階の感覚残るわが体

中葉の卯月の風は生暖たかく小雨と花を散らしたり

はらくくと苗木桜も三十余年太くもなりて花を散らせり

わが夫の熱下りたる穏やか顔を見れば私の胸もおだやか

この八階をゆさりと揺する東北震度六弱の名古屋震度二は

わが夫の穏やかな顔見舞ひたる私の気持の落ち付きぬ

まだ続く東日本の余震のニュースその度胸のドキ／＼す

夫の手と握手する時その時間テレビ見せつつつながる一時

春雨と言ふには何故か寒き雨娘の休日待ち待ちて

我夫の一日一日と願ひつつ七年目なるを春雨見つつ



## 天女の如く

新城 半田うめ子

白き藤数多に生ひき伐られたり国道添ひに土地けずられぬ

思ひ出の小山先生親切に園長としてやさしかりけり

孫香奈は天女の如く社殿にて浦安の舞ひを美しく舞ふ

広きなる椿屋敷思ふなり御津先生の教へを受けたり

木蓮の美しき花朝風にはらはらと散る吾が庭の中

雷の鳴りてゐるなり吾が父はくわばらくわばらと言ひつつをりき

小魚の数多に居りき埋められぬ残念なりぬ前の小川は

温泉へ引佐細江も通り過ぎ館山寺へと楽しみ向ふ

孫香奈の作りしませ飯今日も又味のよくして楽しみて食む

長々と続けてをりぬ甲高く言葉は乱れ電話の声は

## 大栗安へ

豊橋 佐々木利幸

歩数計をカメラ鞆に納めつつ今朝は大栗安へ撮影に来たり

藤の花が咲けるを見つつ歩行する観音山の散策道路

万葉集を読み知りたる鹿玉は三岳の裾に次郎柿植えて

双眼鏡を当てて凝視したり剪定がよき杉峠の次郎柿の畑を

大栗安の棚田を今日は撮りて居り歩めることを喜びながら

池主が詠みたるを我は思い出して葦を撮る大栗安の畦に

五千歩も今日は歩けば清々と大栗安の棚田を撮りて

老化して行く過程なり淡々と今日は思ひ居り両膝の疼痛を

久々に我はトラクターを操作したり膝の疼痛を忘れむとして

私家版日本語文法を読むことも無し気楽に歌を詠まむよ

## 大根

豊川 内藤 志げ

トンネルの形のままたに緑なす玉蜀黍に午後の日穏やか

寺庭の枝垂れ桜は花盛り縁に並びて甘茶を頂く

白浜の白きを恋し今日の浜小石の浜は真白にあらず

空高く舞ひみし鳶は急降下釣りたる人の獲物を奪ふ

翔びながら奪ひし獲物を食む鳶をバスを待つ間の南紀の浜に

温かき日射の中に白浜の小石を拾うわが家の三人みたり

今季にて大根作りは止めにせむ夫の心は未だ定まらぬらし

豊橋の中央市場の顔馴染み互の大根話すたのしも

大根を作りて生活くちし成してこし幾十年も今は短かし

揺れてゐる楓に門径狭めらるあかき若葉の季がよろしも

京小袖

豊川 弓 谷 久 子

くれなゐと白に花びら染め分けて椿咲き初む名は京小袖

浄願寺より一枝貰ひて幾年ぞ京小袖咲く大輪椿

曇り日の朝祭りの花火らし音くぐもりて轟きもせず

氏神様の桜が今日は満開と話してやらむ臥しゐる姉に

境内の染井吉野のこの一樹我の今年の花見となりぬ

花片が風に追はれて渦巻きぬ桜の季もかく終りたり

牡丹の花咲きしと招ばれ久びさに訪れ来り子等の家へ

牡丹の園の百の花より子の庭のこの一本に我は満ちをり

祭礼も選挙も済みたり町なかに囀ずるつばめの声聞え来る

咲き盛る乙女椿の木の下にシヤガひつそりと咲きて萎えゆく

## 始まりは

蒲郡 杉浦恵美子

始まりは覚えて居ぬが終の日は一刻一刻閑かに噛みしむ

始まりの三十六年昔には鉛筆贈りてくれし父在り

始まりは鉛筆握りて一字ずつ原紙に問題切つて居たっけ

六人が一挙に退職我が職場団塊世代の我々故に

こともなく終の日過ぎぬ今日からは介護に専念有明の月

病む夫を朝から介護に勤しめる今日から変はるわたしの暮し

病室に我が夫が待つ我を待つ独り待ってるひたすら我を

我が夫は声をなくしぬそれ故に代りに伝へてやらねばならぬ

丸一日まともな会話もしなかった仕事を辞めて一週過ぎた

何となくそわそわしてる午前九時今頃高校始業式時刻

## 想定外

東京 北川 宏 廸

絶対を想定外が覆へす想定外に絶対がない

大地震・津波・原発驚くな三春みはるの春は梅・桃・桜

数学にて正しいことは絶対なりとなぜ正しいのか人には分らぬ

渋滞とバブル崩壊と驚くなかれ地震と津波と同じ現象

夥しい情報のなかに垣間見ゆる点の情報孤立の恐怖

平成も昭和の歴史を繰り返す放射能・計画停電・集団疎開

液状化現象見たりまざまざと亀裂に噴き出す地中の砂礫されき

携帯ラジオ・懐中電灯・乾電池持ってきたよと神戸の息子

少しずつ耳慣れてゆく放射能恐さを測るミリシーベルト

災害の風評被害を咎めつつコメンテーター風評煽る

## 心配なり

豊橋 伊与田広子

わが近く浜岡原子発電所東海地震に心配なり

来るであろう東海地震を心配しテレビに見入る東北地震

東北関東大震災押し寄する津波はカリフォルニアへ二メートル

今までに見たことのない大震災東海地震思ひやられる

楽しげな鳥の囀り聞へ来るわれの心は晴ればれとせず

幼きはわが物顔に走りし我家成人すれば税に苦しむ

土地買ひて埋め立て借家を建てしこと物心つきたる頃の思ひ出

曲の中重要な箇所練習す指揮者小沢のテレビ見る

N響のベートウベン第九名演奏ズービンメータの適格なる指揮

名指揮者管絃楽団育むなり練習の中に学ぶ事あり

## 雑草

豊川 平松 裕子

雑草といふひと言に括りたり抜きてゆくなり庭の小草の  
伸びたつる庭の小草の一いちに名をつけたるは親しみのゆへ  
どこまでを雑草と言ひ花と言ふかニハセキシウの花はま盛り  
草々のそれぞれの名はいみじくも人間の心のよりどころかと  
鉢植ゑのシャコバサボテンの葉の緑鮮やかにして今年は咲かず  
雨近きま昼間暗き店にゐてラジオよりの明るき声煩はし  
煩はしと思へど消さぬラジオより明日の天気を聞かむとすれば  
客のために置きたるテーブルのチョコレート吾がためにまた包みを開く  
昨日客がしつこきまでに見てゆきし伊万里の皿を今日は吾が見る  
買い手つかぬ銅製恵比須の傍らに新たに並ぶる銅製寿老人



## 八重葎

豊川 山口千恵子

水清らに流れて止まぬ水門川水面にさし伸ぶ桜の枝えだ

黒き板に囲はれ高く川岸の住吉灯台手に触りつつ

様ざまな事おこりたる弥生月庭の牡丹花小さく咲けり

春の日に地震に崩れし北の地よ花咲くここも同じ空の下

棲みをりしあらかたの鯉の姿なし音羽川広く改修済めり

八重葎からみあひつつとりなづむ軍手にからみ八重葎乱るる

たけなはの春忽ちに逝かむとす道端に丸まるたんぽぽわたげ

白しろの花治まりし空豆の小さき莢はみな天を指す

尖りたる小さき青は空を向く花殻まとへる空豆の莢

弱よはと泳げる小さき金魚二匹孫は忘れて帰りゆきたり

## 叡山堇

豊川 小野可南子

大恩寺の山の桜を言ふ人も聞く人も無く四月のなかば

羽ばたきを繰返しつつツバクラメ四月十日のこの青き空

ランドセルを大きく揺らし走りくる一年生佑真の弾ける笑顔

久々に雨降り始む土の匂ひ著けしやさし庭に出でたり

百名を越す僧達の経に唱和親鸞さまの御遠忌に列す

信心の心篤きとは思はざり恩徳讃に和して涙す

回廊より見知らぬ婦人が吾あに寄りて叡山堇と指さしくれき

雨足も弥まし増して今まさに比叡のお山は真白の世界

いつの日か晴れたる山より見下さむ琵琶の形の大き湖

朝風に揺るる緑の莢豌豆指先ミドリに染めつつ摘みぬ

防人の地へ(Ⅰ)

豊川 夏目勝弘

ひたすらに旅人の欲する龍の馬うるは易しそは新幹線

朝出より千歩余りにてのぞみ号いざ飛びたな筑紫の国へ

車窓よりの春の光に読む万葉集憶良の歌は暗きが多し

萌え初めし緑のなかに丸み帯び淡淡白し山桜の木木

春みどり彩る山の狭間には現代風の家家目につく

いづこでの車窓よりの風景は日本各地同じになりきぬ

広島より先は私の未知なる世界関門海峡こゆる楽しみ

海を見ず海峡越えたり家並の上ひろぐる青は筑紫の海ぞ

梅の花終るを待ち待ち今ここに旅人憶良の歌会せし国

久方の天路の遠しは万葉時代三三〇分にて我は筑紫に

## 野 仏

「招待」 秋 山 逸 穂

無念さにすすり泣く声あふれいる葬儀の寺に雨ふりそそく  
川風にわずかな温み感じつつ土手の斜面につくしを探す  
野仏の台座をかこむ下草のなかに針の芽ひしめいている  
頭上より溢るるほどの陽射し浴び柳とわたしと春野に立てり  
暖き空気をふくむ黒土の畝いく筋ものびておりけり

## セピア色

大 阪 伊 藤 忠 男

同窓会の便りのありときめきぬ血潮騒ぎしあの頃をまた  
タンスよりセピア色した写真集遠き記憶の蘇りくる  
ハンテン木の幹に残した思い出を半世紀へぬあの日あの時

## 沖に向ひて

豊 川 白 井 信 昭

テレビにて津波押し寄す映像に刹那よぎりぬ伊勢湾台風  
東北より遠く離るる御津の浜沖に向ひて思ひの多し  
日没まで少し間のありカーテンを閉ざさず居よう外見て居よう

『いっしょよせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

窓の辺に机と本棚あるのみに子規の書斎は天井もなく

牧原正枝

何年ぶりか旭川の友たづね来し思はず我の胸のどきどき

岩瀬信子

灯あかりなき被災地をこそ照らせませこの望月の白き月光つきかけ

三田美奈子

夜も更けて一つの事に思ひはす庭の桜の蕾いまは未だ

稲吉友江

「夫人会」の役目はつひに今日に終ふ今ただひとり豊橋駅に

鈴木美耶子

暁に生まれし初孫抱きをり新生児室のこの光の中

吉見幸子

現代学生百人一首 東洋大学

クラス皆困り顔でもただ一人頭脳明晰電子辞書様

慶応義塾中等部三年東京都 武田祥平

ベッドない医師がいまません今無理です救命救急まさに迷宮

晃華学園中学校三年東京都 古島才

気がつけば母が私を見上げてる少し嬉しい初夏のある朝

晃華学園中学校三年東京都 小山舞

「俳句」

ふるさとの葬に向えり春シヨール

植村公女

停電や春のにほいの春の夜

春泥や言ひ訣いよよ深まりし

すみれ咲く山河破れて耐えて咲く

一石

沈黙の春となるらん息ひそむ

鎮魂の思いは深し春の海

甲斐の山霞晴れば高き嶺々ねね

喜仙

見なれたるげんげ田ある日鋤かれけり

紫木蓮銀閣寺庭雀群れ

葉桜の緑は深し強き風

皓一

石畳タンポポ三つ輝けり

蒼天にいずこの花や二三片

## 私の一首

目標の米寿をやつと生き越してこの先授かる命は尊し

青木玉枝

米寿という目出度い歳を迎え息子夫婦に祝膳をして戴き感謝しつつガン二つ事故三回と生き越した人生に今尚不思議に思う事が一つ消えませんが。平成元年名大退院の節、主治医の教授から、後五年の存命だから好きな事をして心おきなく生きなさいと、それが二十二年も承らえて命の尊さと死出の旅と思わない日はありません。どうして五年で終らなかつたか私は分りました。退院して三年間鰻屋であるだけ鰻の生きも血のまま毎日飲み続けたお蔭です。残生を大切に生きていたいと念じております。

野菜切る音、母さんの音、と孫言へば心乱るる音も乱るる

安藤和代

食事の仕度で大根を千切りにしていると中学一年になる孫が、アッ母さんの音だ、と言ったのにびっくり。何が？と思っている瞬間横に来て、その音その音、と庖丁の音を言いました。母の元気な頃のなつかしい音が甦ったのでしよう。私は何か悪い事してしまった思いと嫁を思い出しそれまでの包丁の軽やかなリズムは途切れしました。その乱れを孫に気づかれまいとすればする程乱れました。そんな時も明るい孫の笑顔が救いでした。

明けの明星下弦の月と並びゐて冴えて煌く吾のあかとき

胃甲節子

厳寒の日々も六時には、出勤される息子さんの為に我家の前の奥様は高齢であり乍ら、とても早起きをされます。私は古い二人遅い時間に起床する事が恥ずかしく思い、朝々の雨戸だけは、早く開ける様にしております。闇深い五時前後雨戸を開けると鋭い下弦の月が、正面にあり、煌く暁の明星が、今初めて気付いた様に美しく、思わず手を合わせました。静寂の中に、家並も眠る、未明の空を、詠みました。今は五時も明るくなりました。



贈呈誌 四月号

「群山」

舟越てい

雪靴の並びてせまき玄関に凜として咲く鉢の寒菊

「秋田アララギ」

眞野ミチ

「榎の木」

竹下祐子

湧き水のかすかなる音聞え来て芹の青葉の凍てつき列ぶ

「秋楡」

江島美代

「穂の原」

松井花子

自ずから部屋を狭めて共に住む寒中守りて花の幾鉢

「愛媛アララギ」

西村チズ子

田中浄子

誰も居ぬひとり部の部屋にさし入りし小春日和のやさしき光

「鹿児島アララギ」

山本和男

バス停にひとつ置きたる木のベンチ雲の間洩るる光り集まる

「高知アララギ」

楠瀬兵五郎

歌集「余祿の人生」

是永正雄

六百号いつの間にか来しおもひ追はれおはれて過ぎし月々

「滋賀アララギ」

佐本三恵子

水草をかたへに寄せてゆく流れをりをり冬の光を弾く

「冬雷」

橋本文子

音もなく雪降り積り音もなく解けて久びさに葉ぼたんを見る

「桜」

加賀要子

木の精の声なき声の聞ゆなりこの鬼怒川の森の深きに

わが路地の凍る雪踏む音の絶えビジネス街は元日に入る

わが家より三浦駅まで一直線電車と車椅子併用の旅

“ つなみ ”  
伊藤 忠 男

私の専門から「水」はあらゆる形にも対応し、いろいろなものになり、優しく包み込む、その上、いろいろな物質を運び、洗う、生物の生命を維持するに無くてはならないものであること等、極めて貴重なものであることもご存じのことです。

しかし、「水」が一度牙をむくと、あらゆるものを押し流し、あらゆるものを破壊する、これも、有史以来、多くの事例が報告されています。この「水」の怖さ、その根底にある「水の性質」。「水」を封じこめ、圧力を加えても、小さくならないこと、いわゆる非圧縮性があります。非圧縮性で且つ自由に形を変えられるからこそ驚異な存在なのです。

この性質は固いと思われる固体にも、目に見えない気体にもない性質です。一旦どこかで、水のかたまりが動かされたら、その動きは伝わってきます。閉塞された場所でも圧縮されません。容積は変わらず、形を変えることが出来ます。そのため、狭い湾では高く高くなり、陸地深くを襲うこととなります。つなみの現象は、この水塊の移動だっ

たのです。東日本大震災はまさにその典型です。地形と大きく関係していたのです。(自分の周りの地形を充分知っておく必要があります)。波は水の移動ではありません。水(分子)がある区間を前後するだけです。そのため、その区間が長いうねりでも、水塊が襲うという現象はなく、波高によって水没する現象が生まれるだけです。

つなみとその威力が異なります。水塊は非圧縮性で、もあり、壁のような圧力をもって覆い被さってきます。例えば30cmでもその力の塊を正面から受けたと同じです。ひとたまりもないことがお分かりでしょう。

つなみは波よりは、移動が恐いことに注目しなければなりません。もちろん洪水も水の移動であり、大きな被害をもたらしています。

「水」という貴重な資源、それは、常に驚異をもたらす刃を併せ持っている、人類史上、何をもたらすか計り知れない存在です。昔から、想定外の被害を起こしてきたのです。

その意味では、想定外ではなく、想定内と理解し、その怖さに対応しなければなりません。

# 和歌から派生した季語の本意（その十一）

「笹」 佐藤喜仙

## 30 青葉（青葉若葉・青葉山）

「花のみや暮ぬる春のかたみとてあを葉の下に散りのこるらん」

盛経母（金葉集）

「夏山をあを葉まじりのをそ桜はつ花よりもめづらしきかな」

藤原盛房（金葉集）

初夏の若葉が生い茂って、青々とした生気をみなぎらしているさまである。若葉は新緑であり初夏の新鮮な季感にあふれているが、青葉は盛夏のイメージである。尚芭蕉は「青葉若葉」と詠んでいるが、濃淡さまざまの葉がまじった様を言っており山の中腹等に主に見られる景である。

例句

あらたふと青葉若葉の日の光

芭蕉

この墓に青葉もるる日のやはらかに

友次郎

青葉目に吹かれ立つ日の山嶺のさま

裕

## 31 螢（平家螢・源氏螢・螢狩・螢籠）

「夕されば螢よりけり燃ゆれども光見ねばやひとのつれなき」

紀友則（古今集）

「音もせて思ひに燃ゆる螢こそ泣く虫よりもあはれなりけり」

源重光（後拾遺集）

螢は腹部に発光器を持ち、夜間青白い光を点滅させ、夏の風物詩にかかせない。幼虫は主に水生で肉食、特に日本では巻貝の川蟻を常食とするが、農業で川蟻がいなくなり、伴なつて螢もほとんど見られなくなった。近年農業を減らして螢を保存する地区が多々あり近い将来螢も夏の風物詩として復活するであろう。

例句

暗闇の笥をつたふ螢かな

許六

ゆるやかに着てひとと逢ふ螢の夜

信子

風涼し銀河をこぼれ飛ぶ螢

朱鳥

## 32 枯若（燕子花・白かきつばた）

「われのみやかく恋すらむ杜若つばたづらふ妹は如何にかあらむ」

詠み人知らず（万葉集）

「唐衣着つつなれにしつましあればはるばる来ぬる旅しぞ思ふ」

藤原業平（古今集）

アヤメ科の「あやめ」「花菖蒲」「杜若」の三つは、花の形や花弁の模様がまぎらわしく、区別に苦労する。あやめは野に咲き、花菖蒲と杜若は水辺の湿地に咲く。花菖蒲の花が多色なのに対し、杜若は紫、まれに白花もある。二首目の業平の歌は「かきつばた」を詠み込んでをり有名である。

俳句

潮ささぬ沢水甘し杜若

言水

野の池や葉ばかりのびし杜若

鏡花

宿坊に酒が匂ふよかきつばた

盤水

## 物理学者と詩歌の世界 (17) | アンドレイ・サハロフ

一石

東京電力福島第一原発は、3・11の大震災に誘発されて起こった大津波の影響を受け、未曾有の重大故を起こした。原発は、大戦中の原爆など核兵器の開発後に「核の平和利用」の謳い文句で導入されたものである。そもそも原爆の開発は、ナチスドイツに遅れをとってはならじと、アメリカが国を挙げて総力で開発したものである。R・オッペンハイマー、R・ファインマン、E・フェルミ（参考資料1-3）など、当時のもつとも優れた物理学者が動員された。彼らがどのよう折に触れ紹介した。人類の頭上で原爆が炸裂したことを知ったオッペンハイマーは、その後核兵器の開発に反対するようになり、後に有名な『オッペンハイマー裁判』を経て公職を追放された（参考資料1）。

今回の主役は、旧ソ連の理論物理学者、アンドレイ・ドミトリ・ヴィッチ・サハロフ (Andrei Dmitrievich Sakharov、1921-1989)。ソ連邦科学アカデミー正会員、1975年ノーベル賞受賞。1938年モスクワ大学に入学、1942年に同大学を卒業。独ソ戦のため、アシハバードやウリヤノフスクで研究生生活を送る。1945年モスクワに戻り、ソ連科学アカデミー物理学研究所の理論部門に勤務、宇宙線やトカマク型のプラズマ閉じ込め方式についてタ

ム(1953年ノーベル物理学賞)と共同研究をした(参考資料4、5)。1948年からクルチャトフの下で原子爆弾の開発に従事。1949年ソ連最初の原爆を完成。次いで水爆開発に従事し、1953年水爆開発に成功する。この功績によりサハロフは、32歳の若さでソ連科学界の最高峰の科学アカデミー正会員となり、国家最高の荣誉と称号を与えられ、「ソ連水爆の父」と称されるようになる。しかし核実験による放射能汚染を目的に、特に大気汚染を懸念し、核実験の中止をソ連共産党第一書記のフルシチョフに進言する。結果的に1963年の部分的核実験禁止条約の締結に尽力した。

また、同時期に物理学の分野では、宇宙論や素粒子論に関する論文を発表し始めた。特に、宇宙のバリオン非対称性は「C P対称性の破れ」によって生じたとする(現在広く受け入れられている)理論ならびに量子重力の代替的な理論として誘発される重力のアイデアは、宇宙論や素粒子論に大きなインパクトを与えた。これらの業績はサハロフが物理学者としても超一流であったことを物語っている。

1960年代後半から民主化を求めて社会的発言を公表するようになり、1968年「進歩、平和共存、知的自由に関する考察」を地下出版する。同考察は、同年西側で公開された。このことからサハロフと国家の関係は悪化し、国家はサハロフを軍事機密に関係する研究から遠ざけるようになった。

このことから、科学アカデミー正会員としての保障された生活を投

げ打って、自らの良心に基づいて反体制運動家、人権活動家として、人権、市民的自由的、そしてソ連の改革を主張するなど、政治的な言動が常に注目され続けた。

1970年代から、異論派の中心人物となり、人権擁護活動に挺身、モスクワ人権委員会の創設者の一人に名を連ねる。1972年には、エレナ・ボンネルと結婚。1975年ソ連での活動を評価されてノーベル平和賞を受賞。しかし、ソ連国内では、受賞に対して批判の対象となり、批判キャンペーンが党の主導で起こされた。

1980年ソ連のアフガニスタン侵攻に抗議したため、当局に連行され、ブレジネフ最高会議幹部会議長命令によって一切の榮譽を剥奪され、ゴリキー市に流刑されKGBの監視下に置かれた。1981年、義理の息子の婚約者の出国を要求し、また1984年、ボンネル夫人の病氣治療のための出国を要求し、ハンガーストライキによる抵抗を続けた。

1986年ゴルバチョフによって流刑が解除され、モスクワに戻る。以後、ペレストロイカの進展を支持し、ソ連人民代議員大会が創設されると科学アカデミーから人民代議員に選出される(1989)。人民代議員大会では、急進改革派に属し、アフガニスタン侵攻を批判するなど良心と勇氣に基づく発言は人々の尊敬を集めた。

1988年欧州議会は、サハロフを記念し、「サハロフ賞」を創設し、言論及び思想の自由の擁護に尽くした人々や組織に賞を贈っている。

サハロフの言葉から。

○「明日は戦いだ」。心臓麻痺のため急死。その前日、夫人に最期に語った最後の言葉。

○「技師サハロフ」。国家と戦い始めたサ反体制派サハロフを科学者ではなく意図的に「技師」と称して貶めようとした政治家の言葉。

○「社会における宗教の役割について、私はソルジェニーツィンと意見を異にする。信仰あるいは、その欠如は全く個人的なことであると思う。」  
○「ソルジェニーツィンと違って、私は社会主義制度にも西側制度にも、ともに欠陥と健全な原理とを認める。この二つの制度の収斂は可能だと思うし、その見通しこそが人類を滅ぼしかねない対決から救済するチャンスだと歓迎する。」

#### 参考資料

- 1) 三河アララギ、ロバート・オッペンハイマー、P 36、第58巻、第1号(2011)
- 2) 三河アララギ、リチャード・ファイマン、P 36、第57巻、第12号(2010)
- 3) 三河アララギ、エンリコ・フェルミ、P 36、第58巻、第5号(2011)
- 4) フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』、アンドレイ・サハロフ
- 5) アンドレイ・サハロフ『サハロフ回想録』、読売新聞社刊

## 鎌田敬止という人（五十四）

「月虹」 鮫島 満

白玉書房時代

〈高村光太郎との交流（16）〉

ここでも鎌田の仕事は早く、光太郎に、「智恵子抄」重版は昨日から刷り出しました。十三日発売の予定です。検印紙お待ちしてゐます。（中略）東京朝日八月一日の第一面に広告が出ました。大阪も九州も出ます。読売新聞は八月十一日号に二回目が出ます。」（昭和二十三年八月十日付）とか、「今日検印を忝く拝受いたしました。（中略）明後日に仕入部数が決定しますから明々後日の十八日に搬入する順序です。夏枯れ時でも智恵子抄二千部では不足すると思ひます。」（昭和二十三年八月二十日付）と知らせるほどの進行状況になっている。こうして順調に進み出すと、鎌田はもう次の企画を提案し始めている。

鎌田は前の手紙の中に、

来年から新作を一篇でも二篇でも加へて戴き一九三九年度版一九四〇年版といふ具合にして祥月命日頃に出して行くやうにしたらどうでせうか。さしづめ病状記もお書き願へたら大変よろしいと思ひます。この年刊のことお考へ下さいまし。

と書いて、恐らく今までなかったような大胆な計画を告げたのであった。この考えを鎌田は実現に移したくて、追って「来年は一九四九年度版を是非出したい」（昭和二十三年九月六日付）などと何度か書き、ついに「初秋発行予定の新版智恵子抄は切抜絵の意匠にして面目を一新させることに致しませう。雪解を待つて（中略）新原稿も装釘原稿も頂戴し」（昭和二十四年二月二十四日付）たいと書いている。この提案に対する光太郎の反応がどうであたかを示す資料は今のところ存在しないが、光太郎はあまり乗り気ではなかったものと思われる。

龍星閣・澤田との約束について光太郎の抱く疑問を解いて順調に滑り出した白玉書房版『智恵子抄』と鎌田にとつてうれしいことが起きている。まず、鎌田の光太郎宛の書簡を読む。

○東京新聞に、藤間節子？でしたかが、「智恵子抄」の舞踊化をするといふやうな記事がありましたが進んで居るのでせうか。立派な舞踊になる事は望ましい事ですが、どの位できる人なのでせうか。

（昭和二十三年七月二十四日付）

この話が決まったちようどこのころ、光太郎は藤間節子に、「『智恵子抄』を舞踊にするといふ事、あなたなら智恵子を下等にしてしまふ事はないと信じますから快く承諾いたしますが、藤間節さんがどんな表現を創造するか推察もつきません。」（昭和二十三年七月二十五日付）とはがきを書いている。

鎌田の問い合わせに光太郎は、話は決まった、今後も新聞発表に気

を付けるがよいといった返事をしたのであろう。鎌田は、手紙に、「藤間節子の発表会は気をつけておませう」（昭和二十三年九月六日付）と書いている。

話が実現に向かって進んだことは光太郎の藤間節子宛の手紙、

このリサイタルがあなたの芸術に於ける一つの飛躍となる事をひたすら念じてゐます。プログラムを見るのがたのしみです。尚恐縮ながら招待券を二枚「智恵子抄」の出版者である鎌田敬止氏に送つて置いて下さい。（東京都大田区（田園調布局区内）調布嶺町一ノ一三四、白玉書房 鎌田敬止氏）

によつてわかる。招待券を手にした鎌田は光太郎にその礼を、

○藤間節子さんから智恵子抄の切符式枚送つて下さいました。先生からのお言ひつけと云ふことで恐縮に存じました。先生の御名代のやうな恰好のやうでしてなかなか気の張るのですが、できるだけよく見て来ることにいたします。私は永いこと芝居や踊から離れてゐます。十一日に帝劇へ行けば実に何年ぶりかであつた所に行くことになりました。戦争中は勿論戦後もまだ一度も映画さへ見たことありません。それに目にあつた眼鏡もないのですが踊なら大体のうごきはわかるかとおもつてゐます。とにかく楽しみでもありますが一度もお目にかかつたことのない智恵子さんがどんな智恵子さんに

なつて現前するかおつかない気もちの方が強うございます。

（昭和二十四年五月二十九日付）

と書き、戦中戦後を余裕なく生きてきたことと、光太郎の「御名代」として観劇することの緊張を吐露している。

そして、鎌田は妻の野溝七生子との観劇の感想、報告を次のように光太郎に書き送っている。

○藤間節子さんのリサイタルももう五十日前のことになりました。（中略）智恵子抄からの三ツのうちでは「千鳥と遊ぶ智恵子」を舞踊化したのが一番よかつたと思ひました。幕あきの砂浜に長くねそべつてちつと空に眺め入つてゐるポーズの美しさは殊に圧巻でした。三曲通じて動きの少いこと踊りの少いことはやや情熱の不足を感じさせるやうですが、それだけに内省的で何と言ひますか、いはば大変謹んで踊つてゐるといつた工合でその点好感をもつて安心して見てゐられました。（中略）先生のいちばんお案じになられたと思はれもし私達も心配してゐた点では節子さんは立派に品をもつてゐました。あの品を失はずに「智恵子抄」の詩を征服して先生の大きな人格の圧力から自由になつて踊れる日が来たら節子さんの「智恵子抄」はすばらしいものになるのではないでせうか。（以下略）

（昭和二十四年七月二十七日付）

## 絹の話 (6) 「アトリエトレビ」今 泉 雅 勝

### 絹と災害

これまで絹は美しいばかりでなく、極めて特異な機能性を持つている事を記してきました。

これからは絹を健康維持に役立つような利用方法をもっと広げて行きたく思います。

この度の大地震、大津波の際、絹の下着を着ていた人は避難生活で無意識の内にずいぶん助かったと思います。それではどんな風に助かったでしょうか。絹は防弾チョッキに利用されて来たくらいですから、物が当たった時、打撲や外傷から少しでも身を守ってくれたでしょう。外傷を受けても優れた抗菌性により化膿する事は無かったと思います。水に濡れた時、絹は綿の2倍（着用時は4倍）の早さで乾きますので、気化熱で体温を奪われる時間が短くなり、低体温化を防ぎます。（今日では冬山登山家や極地探検家には常識になっています）更に繭の中の蛹を守る為の保温性が機能して血流が促進され、熱くはありませんがゆつたりとほのかに温まります。ストープの無い中、寒さに何とか耐えられたではないでしょうか。

命からがら避難所に着いた後、低体温で亡くなられた方も多数い

らっしゃると聞きますが、日常なら僅かな事が生死の明暗を分けま

絹の下着を着ていると皮膚と下着が擦れ合って微細な三角形の絹糸の構造により、皮膚の古くなったかく質層を削り取って、新しい皮膚にしてくれます。しかも抗菌性により雑菌の繁殖を防ぎますので、体がかゆくなったり、異臭を発する事も有りません。従ってお風呂に何日も入らなくても以外とさばさばしております。絹の下着は綿の様に汚れませんので1週間位着続けても大丈夫です。風呂や洗濯に不由な所では大いに助かります。

避難所の板張りに長期間の寝起きでは腰が痛くなります、そんな時絹の腹巻きや厚い絹のマフラー等を腰に当てて寝て下さい、腰痛から解放されます。

大混乱の中、軽い打ち身や切り傷等はなかなか診療してもらえませんが、持ち合わせの絹布を巻いて下さい、薬など無くても意外な早さで治癒するでしょう。

絹はどんなに古くなっても機能性は衰えません。全国の家庭には何兆円もの絹製品が保存されています。使わなくなった絹製品を色々な用途に再意利用して、資源を有効に使って頂きたいです。

特に野蚕絹は高い機能性を発揮します。野蚕の食生はクヌギやブナ、カシ等ですので、多種多様な生物を育む環境を育て、豊かな河川や海をも約束してくれます。



# 「氷魚」のことから (125) 岡本八千代

## 第十四回 梅による柳うつくし今朝の春

非風道人稿

午後からは、空が曇ってきて風も強く吹いてくるようになった。また思う。

雨二毛負ケズ 風二毛負ケズ……を。

東北地方の復興なるかという矢先、まだ大きな余震もつづき、今また原発事故が起った。原発事故はその収束の手だてが見つかからないままの日が続く。天災と人災？日本の国がどうなってしまうのか？不安な日々である。

しかし、季がくれば、生物は芽ばえ、萌え出してくる。この自然体に私は敬服し、なんとか生きてあらば、まず身のまわりのことと手近かなことから、慎ましくも、約つづまやかにも活してゆきたいと思うこの頃である。

捨ててありし小さき大根の花さへも白じろ小さくその花あかり

ここからは、先回をつづき。

第十三回 板屋根に眠りをさます霞かな

花ぬす人稿

音たてて藪が格子戸にふりこみ 風がするどく吹きこんでいる。

紀尾井と小松は炬燵にさし向っている。

○山西増子は、小松の家へ訪れる。

○山西と小松が、芸者身分と自分（山西）とのちがいを言い争う。

○たまりかねた紀尾井は、ふすまを開けて出て来た。——山西は後も見ず御神燈を突き破り格子戸をあけたまま帰り去った。

○その後、小松が泣き伏していたので、紀尾井は起こし涙をふいてやった。

○紀尾井は、かえって小松を思いやり、この家に一ヶ月あまりも居た。○小松は芸者のなりをやめて、素人のようにつくりをして、紀尾井と仲むつまじくなくてゆく。

○小松と紀尾井と奴と亀井戸の梅見見物。

○そこで、三人は、また、山西と他女学生と会ってしまった。が、山西は前とは違って対していた。

いばらより梅のうつくしけさのはる

第十五回 老いた木にからびつきけり梅の花

花ぬす人稿

○山尾という書生が紀尾井を訪ねて、小松の家へ来た。

○紀尾井と山尾は外に出る。——山尾は紀尾井に「芸者社会に居ることをやめよ」と言いきたのだった。

「終に優柔に流れて大志を屈するから困る」と山尾は注意した。

○山西は、女学雑誌に論文を出した。

「ここはいづこぞ、梅はまだ残る寒さに全くは咲きやらねど秋の七草は枯れ尽して我のみほこりがに笑うは鞠場の園の梅なり」と。

山尾は、この論は紀尾井に当るといった。

(つづく)

## ことのはスケッチ (390) 今泉 由利

### 『短歌クラス』

「人には人の考えがあり、自分は自分の何にも作用されない考えがある」「自分の考えることは、友達やいろいろな人と、あまり同じではない」「自分は、あまり大切な位置に存在していない」…小さいながら自分をそんな風に考えていた。

そして「自分が人に教えるという立場になることはない」とも思っていた。

長じて、教職課程は取らなかつた。その空いた時間は、試したかつたこと、行つてみたかつたところ…全部を尽くして遊んだ。

その続きのまま、日本から一番遠い国へも行つてしまったのだけれど。そこでやつと、自分で収入を得なくては生きてゆけないことを知り、父母がもたせてくれたものが売れたり、自分の絵が売れていたり…売れた絵の關係で、日本の芸大みたいなアルゼンチンの大学から「日本の染織を教える」という要請があり…あまりに立派で威厳のある教室が私に用意されたので、「教職取つてませんから」とことわつてしまつた。

「引き受けていれば、…今ごろ偉くなつていただろう…」。やはり私には似合わない。

アルゼンチンと日本と…何らかの役にたてば…とはじめた「仕事」も、遺伝子組み換えとか、物を造る姿勢とか…私の手におえなくなり「やめる」判断をした。

隣の「介護の仕事」をしている友人に、別れのあいさつにゆくと、「介護センターで短歌を教える」という話になり、「一緒に過ごす」と

いうことで引き受けた。

手頃サイズのスケッチブックを用意し、どんな色も揃っている色鉛筆と、水彩道具と、その日咲いていた桃の花とを携えて介護センターへ出掛けた。

「絵は描いたことがない」「恥ずかしい」「今まで自分のことなど考える余裕がなかつた」…などなど聞こえるけれど、桃の花が散つてしまわないうちに、まず自分が、勝手に描きはじめてしまつた。

気付くと、皆も描きはじめてくれた。『短歌とは、自分の目で見、感じたことを、自分の言葉で表現することであり、それには実際に描いてみることを、よく見て描いていると、今まで気付かなかつた自然の現象が見えてくる。別の世界が広がる。言葉が自然に湧きだしてくる。心がリラククスする。』

描いている花のルーツや、思い出や、世間話もしながら、世界で一つだけの絵や短歌が自ずからできてしまふ。

センターに飾つてあるお雛様も、お内裏様も一緒に描き…。そして、この短歌をつくられました。

エーゼットに飾られる雛描きまでせわしく飾るわが三代の雛

阿部 淑子

エーゼットに來られる途中の工事現場に切り捨てられてあつた紫もくれんの大きな枝を抱えてきてくださった日には。

工事場に捨て置かれありモクレンの蕾の枝の水あげいのる

阿部 淑子

スケッチブックの絵に、短歌が添えられ、どんどん増えて居るのです。

## 和菓子街道 (56)

<http://www.trad-sweets.com/>

平松温子

以前、人から頂いて、桑名に来たら是非、自分でお店を訪ねてみたいと思っていた「たがねや」。その名の通り「たがね」という煎餅を作る店だ。たがねは、もち米とうるち米を混ぜて搗いたきじを焼き上げ、溜り醤油にくぐらせた醤油焼き煎餅だが、元は細長いものを束ねた形状のことをいった。古代、稲穂の刈束の数で作物の量が計られ、刈束そのまま神前に供えられていた。この御神供の刈束が後に餅に替わり、その名残りを伝えるのが、桑名を中心とする三重県北勢地方で食べられている「たがね餅」だ。うるち米ともち米を搗いて作る餅で、うるち米の粒が残った郷土食の餅だ。そして、このたがね餅を薄く切って焼き、醤油をつけたものがたがね煎餅というわけ。



米のつぶつぶが残っていて、噛むほどに米の旨みが出てくる。こういう素朴な味に出会うと、旅をしているのだなあと改めて実感するのだ。

桑名特産の底引き溜り醤油のしっかりとした味と香り。炭火の手焼きはたがね屋だけ。

◆たがねや

住所：三重県桑名市田町30

電話：0594-22-2828

## お知らせ

▽六月歌会(95)は、六月二十六日(第四日曜日)正午より、生涯学習会館(旧御津町中央公民館)にて行う。

昼食を用意いたします。

※会費 二千元

※詠草二首をハガキにて、六月二十三日(木)までに必着、郵送のこと。

▽七月号原稿は、六月一日(水)までに必着郵送のこと。

## 歌稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A  
〒一一一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 編集後記

△六月二十六日の歌会について

詠草二首の歌評のあと、三河アララギの五月号を各自持参して、自らの歌、又他の作者の判らない点、感動した処等々より深く勉強したいと思えます。

四時間という時間を有意義に過ごしたいものです。

△講読会員の方々も是非参加して下さい。

三河アララギ誌、追加ご希望は、編集部までお申し出下さい。料金はかかりません。

△桜の開花も遅れ、やっとこの頃葉桜となりました。鶯の鳴き声も今年はまだ聞いておりません。

気候不順が続いていますが、会員の皆様くれぐれも体調を崩すことのないようにと願っています。

(小野)

## 三河アララギ規定

◇「三河アララギ」に短歌を寄稿する者は、「三河アララギ」会員であることを必要とする。

◇規定の会費を送金すれば、すぐに会員になることができる。

◇会員には毎月歌誌「三河アララギ」を送付する。

◇会費は、平成十年一月一日より、半ヶ年分二万円、一ヶ年分二万円の割で前納された。ただし、購読会員は、半ヶ年分二千元、一ヶ年分四千元とする。

◇会員は、住所変更の際は、すみやかに通知せられたい。退会の際も同様ただちに連絡せられたい。なお、退会の際の既納会費は、返戻しない。

◇会員は、発行所開催の諸会合に自由に出席することができ。

◇会員は、短歌・その他論文・随筆等を送稿することができ。毎月一回一日締切り厳守。なお原稿は一切返却しない。ただし返送希望者は返信封筒の同封があればお返しします。

平成二十三年五月二十五日印刷 第五十八巻 第六号  
平成二十三年六月一日発行 定価 六 百 円

### 編集部

岡本 八千代・小野 可南子・夏目 勝弘  
平松 裕子・山口 千恵子

### 発行人

今泉 由利

### 発行所

三河アララギ会  
三河アララギ発行所 〒四四二一〇三二一

豊川市 御津町 御馬 西三七

T E L (〇五三三)七五・二〇〇九

振替口座 〇〇八三〇一六・五六三二九

### URL

E-mail yut88@cronos.ocn.ne.jp/  
Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

### 印刷所

株式会社 桜 創 美